

普通学級内における脳性まひ児の適応に関する一研究

安藤 隆男・石部 元雄

I 緒

人間の成長の場として重要なものに集団が挙げられる。人間は誕生と同時に家族集団に属し、主として垂直的な人間関係のもとに、その生命を維持し、発達を保障される。機能の分化に伴う生活圏の拡大は、家を中心とした近隣遊戯集団への参加・形成を促し、さらに地域学校集団へというように、集団の系列化をみるに至る。このもとで初めて人間の社会的形成が達成され、集団系列化からの離脱は社会的不適応を意味し、極端な場合には周知のような野生児という事態をも招きかねない。このように個としての人間と集団とは、相互規定的関係にあり、この意味で個々の人間は、社会的存在としてとらえることができる。

障害を有する児童においても、本質的にはその例外ではない。ところで、これまでのわが国の特殊教育の実情をみると、分離教育 (Segregation) が主流をなしており、また研究者側、つまり特殊教育研究分野において、溝上 (1970) も指摘しているように、障害児の社会的関係に立脚した研究は少ない。そのため、ともすると「社会的存在としての障害児」の認識は稀薄化してしまいがちである。

ここでは、こうした社会的存在としての障害児の研究に注目して、これを検討しようとするものである。いま、社会的研究を大別してみた場合、巨視的視点から社会をとらえた研究と微視的視点から社会をとらえた研究とに便宜的に分けられよう。

前者に関しては、三沢 (1969)、忍 (1969)、伊藤他 (1968) が挙げられる。

三沢は Jordan, J. E. ならびに Cessuna, W. C. の cross-cultural studyの一環として、わが国における身体障害者への一般人の態度を調査し、その結果、一般人の態度は、好意的な反応が多かったにも拘わらず、内面的には negative で、障害者への社会的距離が存在するため、政府などへの批判や期待がクローズアップされる

反面、一般人は、自己に関与する問題としてとらえていない傾向がみられた。

忍 (1967) は一般成人の身体障害者に対する偏見について調査した。その結果、全体的には好意的には受け入れられていたが、具体的で身近な生活場面では好意的反応が薄れていた。

伊藤他 (1968)、尾島 (1968) の研究等も同様に一般人の障害者への態度はまだまだ negative であるという研究結果を共通に得ていた。

後者、つまり微視的視点から研究を展開したものとしては、障害児の在籍する学校や学級集団を小社会としてとらえた研究が挙げられよう。飯田 (1968) の研究のように、精神薄弱児を対象にしたものが多く、肢体不自由児を対象に絞った研究は少ない。

そのなかにあつて小川 (1974) は、養護学校を経ずに入学当初より普通学級に就学している脳性まひ児 (cerebral palsy, 以後 C P 児と略す) の父兄、及び担任教師に調査を行ない、普通学級内での C P 児の問題を多角的に分析した。普通学級への就学上の問題点を指摘する一方で、担任教師が学級内での C P 児の存在を positive に評価したという結果を明らかにした。

以上これまでの社会的研究についての概観をしたが、肢体不自由児の集団内でのダイナミックな側面を理解するには至らないという問題が一様に感じられた。そこで、このダイナミックな側面をとらえるためには、直接肢体不自由児を含む児童集団を被験集団にした研究に焦点を絞る必要がある。この分野で比較的多くまとまった研究には、ソシオメトリーを用いたものが多くみられる。

この研究法によって、Centers, L. & Centers, R. (1963) Soldwedel, B. & Terrel, I. (1957) は肢体不自由児の被選択が低いことを報告している。又、Dewey, G. & Force, D. (1956)、及び Anderson, E. M. (1973) も肢体不自由児の被選択が低く、C P 児はなかでも最も低かったとしている。

肢体不自由児、なかでも C P 児の学級内での適応状況

Table 1 対象児のプロフィール

性別	C.A.	学校・学年	障 害		人格及び行動的側面	学校生活及び就学前教育歴
			A.D.L.			
S-1	男	11:4	埼玉県市 埼玉口 川小5年	アテト一ゼ 四肢硬直 発声困難 車椅子使 食事可介 その他介助	おだやかで協調性もあり 班活動にも積極的に 加わる。人に頼らず、 自立心有り	教研式知能検査 SS 41 学業成績 良上 学習活動は体育を除き参加 昭和45年8月～48年3月 都立療育園通園
S-2	男	9:7	東京都 東北小4年	スバスティック 右手右脚に障害 自立歩行ほ A.D.L.はほ 自立	ほがらかであるが、他人 への依存傾向有り (特に母親に対し)時に 興奮すると自我をおし 通すことあり	TK式2B知能検査 31(SS) 学業成績 やや劣 学習活動は一応参加 昭和46年9月～49年2月 都立療育園通園
S-3	女	9:7	東京都 東立小4年	スバスティック 四肢硬直 自立歩行ほ A.D.L.もほ 自立	打ちとけるまでに多少 時間がかかるがなれる とよく話せる。自立心 があるが我が強い面、 意固地な面もみられる。	東大A-S式知能検査 SS 41 学業成績 やや劣 学習活動は一応参加 体育時は母が相手 昭和47年6月～48年4月 都立療育園分室
S-4	男	10:4	東京都 東板橋小4年	スバスティック 右上肢の他に障害 体立歩行ほ 自立歩行ほ A.D.L.もほ 自立	温順だがまん強く、協 調性もある。負けずぎ らいで何にでも積極的 活動的に取りくむ。	東大A-SH式知能検査 SS-47 学業成績 普 体育を除き、学習活動に参加 体育時は母が相手 期間不明 都立療育園通園
S-5	男	10:4	茨城県 茨城小4年	スバスティック 両下肢障害 自立歩行ほ A.D.L.もほ 自立	社会性は大きいがあるが 攻撃的で自己中心的、 わがままな面もある。	教研式学年別知能検査 96 学業成績 やや劣 体育のみ見学、他児と全く同 じつもりで何でもやる意欲が ある。小学1年まで養護学校
S-6	男	11:6	千葉県 千松小5年	スバスティック 右手右脚に障害 言語障害も有り 自立歩行ほ A.D.L.もほ 自立	情緒も安定し、社会的 で誰とでも親しくする 活動的で努力家	教研式学年知能検査 28(SS) 学業成績 普 すべての授業、諸活動に意欲 的参加。普通幼稚園2年在籍

は必ずしも positive ではないことが以上からも理解できよう。しかし、残念ながらわが国においては、このような研究とほとんど皆無に等しい。

本研究は先の問題点をふまえ、普通学級への統合が最も困難を有すと思われるCP児を対象に、在籍学級集団でソシオメトリック・テストを用いて、ダイナミックな側面を把握し、そこでの適応をいくつかの視点より分析検討し、CP児の普通学級内での統合に関する基礎的知見を得ることを意図している。

II 目 的

アプローチ1:

特定の事例について3次元(モナディック, ダイアディック, 集団構造次元)より総合的に検討する。

アプローチ2:

対象となったCP児全体に関するテスト反応をいくつかの視点より分析・検討する。

以上2点を中心に、普通学級内におけるCP児の適応状況をみていくこととする。

III 方 法

1) 対象児

普通学級に在籍するCP児6名。

・対象児は入学当初より普通学級に在籍していたか、低学年段階で転入した小学校中・高学年児とした。

対象児に関するプロフィールは Table 1 に示した。

尚、対象児に関する資料は、個人調査として担任教師にアンケート用紙を配布し、回収したものにもとづいて作製した。

2) 質問紙ソシオメトリック・テスト

Table 2 対象児のソシオメトリック・テストの結果

	被選択数 (C)	被排斥数 (R)	C-R	相互 選択数 (mc)	相互 排斥数 (mr)	社会測定的 地位指数 (Isss)	学級平均 (Isss)	判定 *	学級構成
S-1	2	3	-1	1	2	-0.11	0.15	第2(2)	N=41 (m=25 f=16)
	2	2	0	2	1	0.10	0.16	第1(21)	
	4	3	1	1	2	-0.09	0.18	第3(2)	
S-2	0	6	-6	0	0	-0.10	0.13	Is.	N=32 (m=18 f=14)
	3	7	-4	1	0	0.04	0.14	第1(13)	
	3	6	-3	2	0	0.15	0.14	第2(13)	
S-3	5	3	2	1	1	0.04	0.14	第4(2)	N=29 (m=17 f=12)
	3	2	1	1	1	0.02	0.15	第4(2)	
	6	1	5	1	1	0.09	0.13	第3(2)	
S-4	2	6	-4	1	0	0.05	0.21	第1(19)	N=42 (m=22 f=20)
	1	5	-4	1	0	0.05	0.23	第1(21)	
S-5	3	2	1	2	0	0.21	0.16	第1(17)	N=42 (m=21 f=21)
	2	2	0	1	0	0.10	0.15	第2(8)	
	3	0	3	0	0	0.04	0.13	Fr.	
S-6	1	0	1	0	0	0.01	0.15	Fr.	N=45 (m=24 f=21)
	3	1	2	2	0	0.22	0.19	第1(20)	
	3	1	2	0	1	-0.08	0.11	Fr.	
平均	2.2	3.3	-1.17			0.017	0.16	* 所属下位集団	() 内構成人数
	2.3	3.8	-0.83			0.088	0.17	() 内構成人数	
	3.8	2.2	1.33			0.022	0.14		

{ 上段 勉強・相談
 { 中段 遊び
 { 下段 写真撮影 (除く S-4)

QS type

a 被験集団

CP児の在籍する普通学級 6学級

b 集団の範囲

被験学級内の選択・排斥とした。

c 選択・排斥の規準 (criterion)

勉強・相談、運動場での遊び、写真撮影の3場面とした。

<規準設定の理由>

i) 勉強・相談

CP児のIQや学業成績といった知的面、パーソナリティが学級児童にどう反映されているかをみる。

ii) 運動場での遊び

四肢に何らかの障害を有し、運動機能的に劣ると思われるCP児が、最も活動的な小学校中・高学年の児童の中でどう受けとめられているのかをみる。

iii) 写真撮影

容姿の上でCP児が学級児童のなかでどう受容されているかをみる。

d 選択・排斥の数

制限5人まで、

e 実施の手続き

・児童の正確な内的判断がテストに反映されるように、日常的にコンタクトを持つ各担任教師に実施していただいた。その際、事前にテスト実施上の留意事項を説明書として手渡すか、口頭で説明しておいた。

・あらかじめCP児を観察し、書字困難等で解答欄が狭いと思われる場合、特別に解答用紙を準備しておいた。

・実施時間は1校時40~45分とし、各学級単位に集団で実施した。尚、欠席者がいた場合後日必ず実施した。

f 結果の処理

i) 集団的指標

集団構造マトリックス、凝縮ソシオグラム、再凝縮ソシオグラム、連結グラフ等

ii) 個人的指標

CRS (選択排斥差引得点)

社会測定的地位指数 Isss (Index of Sociometric Status Score);

Isss の理論的 Max. は +1 Min. は -1 である。これは集団の中の相互性が加重され、比率で計算されているので、成員の異なる集団の比較も可能である。判定は +.45以上の者を人気者(以後 St.), 被選択が0でなく、相互選択が0の者を周辺児(以後 Fr.), 被選択が0の者を孤立児(以後 Is.) とする。

3) 調査期日

1977年10月及び11月

IV 結果及び考察

アプローチ1:

対象児6名の中から、特に3名を選び事例研究的分析を行なった。

事例はアテトーゼで対象児のなかで最も重度CP児(S-1), また唯一の女兒で、適応で若干問題があると思われた児童(S-3), 対象児のなかにあつて、比較的学級内適応が良好と思われた児童(S-5)の3例である。

S-1 (図中ではB4*)

性別 男

病型 アテトーゼ

学年 5年 CA 11:4

障害が比較的重いADL自立も遅れている。自立歩行は10m程度可能だが、教室内移動は膝立ちが主である。校内では車椅子を利用するが、自分で動かさず誰かが押す。人格的にはおだやかで、とけこもうとする積極性また自立心もある。知的には normal である。

この学級は勉強・相談を規準(勉強・相談場面, 以後“場面”も使用)とした場合, 第1下位集団に学級成員41名の約88%にあたる男女36名が所属しており, Fr. も3名と少なかった。また Is. も皆無であり, 学級の凝縮ソシオグラム・再凝縮ソシオグラムをとってみると, 中央集団が一点に集約し, 学級成員すべてが中央集団化していた。この傾向は他の場面についても同じく見られた。

S-1は遊び場面で第1下位集団に属していたが, Fig.1のように下位集団内でも決して安定したものではない。しかも勉強・相談場面ではB2と, 写真場面では

* 児童番号 (Bは男児, Gは女児の意)

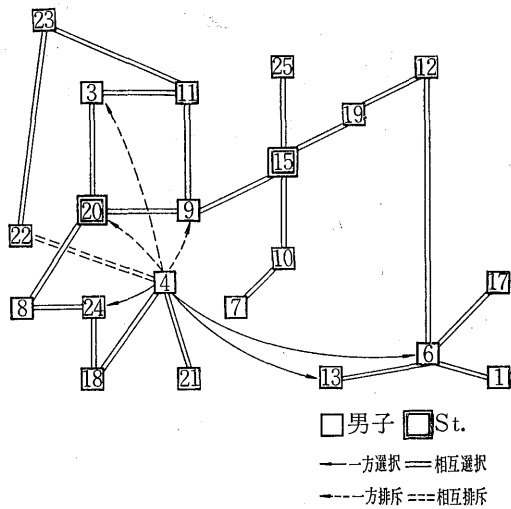


Fig.1 第1下位集団の連結グラフ (B4中心に)

B25とそれぞれ2名の下位集団を形成していた。B25は9月初旬に転入してきた児童で、勉強・相談場面でFr.化するなど学級集団内にまだ完全に打ちとけてないと思われた。そのようなB25と2名だけの下位集団を形成していたことは注意されよう。また個人的指標としてのIsssもTable2に示したように、学級成員平均を3規準とも下まわり、特に2名だけの下位集団を形成していた勉強・相談場面と写真場面で大きく下まわった。

以上の点から判断して、勉強・相談場面、写真場面での適応が問題になると思われた。

排斥された理由をみると、直接学習能力や運動機能的な劣等性をあげるものはなかったが、写真場面で1人だけ「変に写りそう」という理由をあげていた。しかし、S-1の被排斥数は少なく、そのなかでとりわけ問題となる理由をあげたのはこの1例のみであった。学業成績や知能偏差値をみても問題はなく、社会性、情緒性、行動面においても協動的、積極的、自立的であったり、介助を必要とするとき、他児がすすんで介助し、教師も特別にめんどろを見る必要がないという点をも考慮したとき、各場面での学級集団への適応をいわずらに問題視する必要がないと思われた。

ただ、担任教師が指導上困った点をあげた書字動作の困難さ、ADLの未熟さは、直接身体の障害と関係してきており、訓練的また時に医療的 care を必要としているにも拘らず夏休み等長期の休暇のとき就学前に通園した療育園を訪れるくらいで、普段はほとんど学習に関心がむき、この点が関心外になりがちであったことは問題となつてこよう。

Table 4 Fr., Is. の出現率

規 準	勉強・相談		遊 び		写真撮影	
	Fr.	Is.	Fr.	Is.	Fr.	Is.
普通児 N	24	13	21	16	41	10
	(10.7)	(5.8)	(9.3)	(7.1)	(22.3)	(5.4)
Fr.+Is.	37 (16.4)		37 (16.4)		51 (27.7)	
C.P. N	1	1	0	0	2	0
	(33.3)	(33.3)	(—)	(—)	(40.0)	(—)
Fr.+Is.	2 (33.3)		0 (—)		2 (40.0)	

N:数, ()内は%

Table 6 対象児群の選択・排斥傾向

規 準	勉強・相談	遊 び	写真撮影
N	6	6	5
与えた選択	23	21	19
上方選択	19 (82.6)	17 (81.0)	12 (63.2)
水 平	4 (17.4)	4 (19.0)	7 (36.8)
与えた排斥	19	16	12
上方排斥	4 (11.1)	5 (31.2)	3 (25.0)
水 平	15 (78.9)	11 (68.8)	9 (75.0)

()内は%

である。

これによれば、対象児群を選択・排斥する児童の Isss は、全児童平均を下まわる傾向にあった。しかしその差は大きいとはいえない。ここで注意されるのは対象児群を選択している児童の3割強が Fr. か Is. であり、この傾向がどの場面にもみられた。

また対象児群が選択・排斥する児童についてみると、3場面を通して、対象児群は社会的地位の高い児童を選択し、社会的地位の低い児童を排斥する傾向がみられた。特に、勉強・相談場面でその傾向が顕著であった。

このことは何を意味するのであろうか。

田中 (1964) はこれに関連すると思われる仮説をたてている。つまり、

仮説：「一般に、心理的地位階層において比較的低位にある個人は、無意識に自己防衛的態度をとり、上方選択および水平排斥の傾向を示す。このことが集団成員間の親和反発の関係を偏倚せしめる一つの原因となる。」

本研究においても、成員の親和反発関係は各被験集団にみられ、心理的地位階層が発生するのが認められた。

そこで田中の仮説を検証するためデータの再編成を試みた。手続きとして、各学級よりCP児を除いて、CR

Table 5 対象児群の選択・排斥、被選択・被排斥傾向

	勉強・相談	遊 び	写真撮影
選択者数	23	21	19
平 均	St. Fr.+Is. 9 2 (39.1) (8.7)	St. Fr.+Is. 3 2 (14.3) (9.5)	St. Fr.+Is. 3 3 (15.8) (15.8)
	Isss .320	Isss .209	Isss .227
排斥者数	19	16	12
平 均	St. Fr.+Is. 0 6 (—) (31.6)	St. Fr.+Is. 1 2 (6.3) (12.5)	St. Fr.+Is. 0 2 (—) (16.7)
	Isss -.094	Isss .080	Isss .013
被選択者数	13	14	19
平 均	St. Fr.+Is. 2 4 (15.4) (30.8)	St. Fr.+Is. 1 5 (7.1) (35.7)	St. Fr.+Is. 0 7 (—) (36.8)
	Isss .094	Isss .063	Isss .069
被排斥者数	20	19	11
平 均	St. Fr.+Is. 3 3 (15.0) (15.0)	St. Fr.+Is. 1 2 (5.3) (10.5)	St. Fr.+Is. 0 2 (—) (18.2)
	Isss .148	Isss .172	Isss .080
全児童の Isss平均	.159	.172	.138

()内は%

Sの低いものを下から人員の1/5だけを抽出し、各低位者の選択・排斥の傾向を算定した。各学級のCRS平均より上位のものを選択・排斥している場合を、上方選択または上方排斥として、CRS平均よりも下位のものを選択・排斥している場合を、水平選択または水平排斥とした。また対象児群にも操作的に同様な手続きで上方、水平の選択・排斥の傾向を分析したのが Table 6 である。

程度の差こそあれ、CRS地位の低位者群は、ほとんどの被験学級で、どの規準においても上方選択傾向か水平排斥傾向を示した*。

一方、対象児群の方をみると、写真場面での上方選択傾向こそあまりみられなかったが、勉強・相談場面では上方選択傾向、水平排斥傾向がみられた。

田中の仮説にもあるように、上方選択傾向、水平排斥傾向が無意識の自我防衛機制によるとすると、先の結果

* χ^2 検定により10%の水準で有意傾向がみられた。

とあわせ考えると、勉強相談場面で、より地位の不安を感じていると思われた。これは知的学力的にさほど問題となっていなかったとする資料及び教師の所見と矛盾した。

以上CRSレベルにおいて、対象児群の選択・排斥を分析したが、普通学級に在籍するCP児は知的学習面ですら問題とされないにも拘らず、内面的には敏感で不安定な状況にあると推察された。

また、このテストと平行して担任教師に対象児に関するアンケート調査を行なった。以下まとめると、

- (1) 対象児はスパスティック型が多く、障害程度としては軽度であった。
- (2) ADL自立歩行ともに1例を除きほぼ確立していた。
- (3) 知的には normal と考えられた。
- (4) 障害は軽度であったが、障害に起因する問題（例、書字困難 etc.）を指摘する教師が多かった。
- (5) 健康状態は良好で、問題となる欠席はみられなかったが、両親や子どもは学習へ関心が向き、機能訓練的、医療的ケアを受けずにいる傾向がみられた。
- (6) 学習面、訓練的な面で特別な指導を行なっている教師はいず、今後も普通学級で指導していく方がよいとするのがほとんどであった。

これらは小川（1974）の指摘とかなり一致するものであった。

V 要 約

本研究は普通学級に在籍するCP児の学級集団での適応を調査研究することを目的とし、ソシオメトリック・テストを方法的に用いた。その結果、

- (1) 対象児はIsss, CRSともに学級成員平均をだいたにおいて下まわっていた。
- (2) 対象児は全体的に遊びの場面で社会的地位が高くなっており、Fr. やIs. も見られなく、3場面中で最もよく学級集団に適応しているように思われた。
- (3) 対象児は全体的に社会的地位の高い児童を選択し、低い児童を排斥する傾向にあり、特に、勉強・相談場面でその傾向が著しかった。対象児の知的学力的レベルがさほど問題にならなかったにも拘らず、内面的に多くの

対象児がその地位に敏感で、不安定な状況にあると思われた。

(4) 学級集団適応においては、知的学力的な面、運動機能面もさることながら、人格的な面（例、積極性、協調性 etc.）が重要であると思われた。

1回のソシオメトリック・テストであるため、その信頼性が弱く、今後継続的実施の必要があると同時に、方法的限界も考慮した場合に補助的な方法等も必要となる。今後の研究課題として留意したい。

文 献

- Anderson, E. M. (1973) *The Disabled Schoolchild*, Methuen and Co. Ltd., London, pp.290-295
- Centers, L. & Centers, R. (1963) Peer Group attitudes towards the amputee child. *J. soc. Psychol.*, 61, 127-132
- Dewey, G. & Force, D. (1956) Social status of the physically handicapped child. *Except. Children*, 23, 3, 104-107 and 132-133
- 飯田真雄 (1968) 普通学級における精神遅滞児の適応に関する調査研究 山梨大学教育学部研究報告, 19集 175-182
- 伊藤隆二・田川元康 (1967) 心身障害児に対する社会人の態度（偏見）に関する研究。特殊教育学研究, 5, 1, 1-12
- 三沢義一 (1969) 身体障害者（児）に対する一般人の態度について、三重大学教育学部教育研究所研究紀要, 第42集別冊, 43-58
- 溝上脩 (1970) 異常児社会学体系化の一試み 特殊教育研究, 7, 3, 39-45
- 忍博次 (1967) 身体障害者に対する偏見の研究, 北星論集, Vol 4, pp.53-75.
- 小川義博 (1974) 普通学校へ就学した脳性まひ児についての調査・特殊教育研究, 11, 3, 85-92
- 尾島碩心・杉田裕・中野善達他 (1966) 障害児童に対する意識調査, 異特児の心理と教育—尾島碩心教授退官記念論文集, 93-124
- Soldwedel, B. & Terrell, I. (1957) Sociometric aspects of physically handicapped and non-handicapped children in the same elementary school. *Except. Children*, 23, 371-372. and 381-382.
- 田中態次郎 (1964) 実験集団心理学 明治図書。

Summary

A Study on the Adjustment of Cerebral Palsied Children in the Regular Classes

Takao Ando, Motoo Ishibe

This study intended to make clear the realistic problems on integrated cerebral palsied children.

Subjects were almost mildly handicapped pupils in the regular classes, the 4th or 5th grade, of the primary school. The present conditions in classroom-adjustment of subjects were analyzed by means of Sociometric measurement.

The findings were as follows ;

- (1) The average of subjects' Isss and CRS was below that of all members in classes.
- (2) Social status of subjects in the criterion of "Play in the ground" was relatively higher than that of "Study-Conversations" or of "Photograph"
- (3) Subjects tended to choose high social status children and to reject low social status ones. Especially the tendency was clearly recognized in the criterion of "Play in the ground". In spite of normal intellectual abilities, most of subjects had emotional unstability.
- (4) In classroom-adjustment of subjects, their character, i. e. positivism or co-operation etc, was more important than the intellectual ability or motor function.